1年間ついやした想いと試行錯誤が実り ブルガリア発・東京経由の傑作が初登場

『カモメに飛ぶことを教えたドラ猫の物語』は、環境問題と共生をテーマに日本でもベストセラーとなったルイス・セプルベダの小説を、2008年にブルガリアのソフィア人形劇場が人形劇化。以来、世界中の人形劇フェスティバルで数々の受賞を誇ってきた傑作です。2018年春、人形劇団プークはブルガリアを代表するアーティストたちを迎え、プークの俳優陣とともに『カモメに飛ぶことを教えたドラ猫の物語』を装いも新たに共同制作。2018年夏にはオール日本人キャストで上演し、それぞれに好評を博しました。

愛知人形劇センターでは1年前の2021年3月に愛知県芸術劇場で公演予定でしたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響でブルガリアのスタッフ・キャストの渡航が叶わず、無期限延期となっていました。しかし今回、ソフィア人形劇場、人形劇団プークと検討の末、なんとか上演を実現したいとの想いから、12月に再開した損保ジャパン人形劇場ひまわりホールで公演を行う運びとなりました。

たった1回の貴重なステージです。ぜひご来場ください。

愛知人形劇センターPresents
人形劇団プーク×ソフィア人形劇場公演
『カモメに飛ぶことを教えたドラ猫の物語』
2022年3月17日（木）19:00
損保ジャパン人形劇場ひまわりホール
前売2,500円（愛知人形劇センター会員は2,200円）　当日3,000円
出演：マリエタ・ペトロヴァ／佐藤達雄／小原美紗／石田律子／小立哲也／他
演奏：ストヤン・ロヤノフ"Ya-Ya"
声の出演：柴田進

STORY
重油まみれのカモメが命がけで産み落としたタマゴ。
その小さな命を託された黒猫ゾルバは、
大佐・秘書・博士…個性あふれる仲間とともに
ひな鳥に「飛ぶこと」を教えるため奮闘する。
フォルトゥナータ（幸運な者）と名付けられたひな鳥と、
港に住むドラ猫たちとの種族を越えた愛情、
そして希望と旅立ちのものがたり。

人形劇にもSDGsの波!? 私たちの「手」でできることがある

愛知人形劇センターでは、コロナ禍の取組みとしてSDGsをテーマとした人形劇の映像作品を製作します。最近、各種メディアだけでなく企業や学校などでも聞かれるようになったSDGs「Sustainable Development Goals（持続可能な開発目標）」。「具体的にはどういうこと?」「何をしたらいいの?」を、人形劇的な視点でわかりやすく表現し、皆さんと一緒に考えようという企画です。ただし、17の目標すべてを盛り込むのは無理があるので……

★ジェンダー平等を実現しよう
★人や国の不平等をなくそう
★住み続けられるまちづくりを
★海の豊かさを守ろう
★平和と公正を全ての人に

といったことを中心に作品製作を進めました。

SDGsがテーマと言っても教育的な内容ではなく、あくまでも人形劇として楽しめる作品を目指しました。ただし、普通の人形劇だと思って見始めたらなんか違うぞ、となるかも? 人形たちの取るに足らないドタバタ劇を見ながら、「いつも」や「ふつう」を振り返るきっかけになればと思います。

8月からオンラインミーティングを重ね、12月1日にメンバーによる試作実験を行いました。初めは映像作品ならではの操演に戸惑っていた演者たち、演出・美術・映像スタッフのリクエストやアドバイスを受けることで、アイデアを出し作品を膨らませていきました。

上演時間は15分。くすっと笑えてジワジワと考えさせる作品です。愛知人形劇センター公式YouTubeチャンネルにて1月中旬より無料でご覧いただけます。ご期待ください。

ひまわりホールでの制作風景

Interview 制作の裏側を聞きました!

くすのき燕（作・演出）
最初はSDGsが幅広過ぎて困りましたが、むすび座の稽古場に行って、一日かけて技やアイデアを出したおかげで絵コンテへと進めることができました。舞台は近未来的で、人形と手の対決のような展開になるんですけど、セリフはなくてオノマトペで表現します。「自分の手が未来を作れる」というイメージ。俯瞰の撮影とか、舞台ではできないこともやりますよ。ロケも行い、創られたモノと自然が交錯する世界にしたいなと考えています。

宮武史郎（美術）
くすのきさんとは初めてご一緒しますが、お互い作品を観てきたので、とても信頼しています。人形は、くすのきさんのイメージに合わせて制作しました。ユーモアと毒のある感じというのか、「かわいい感じ」と「チクッとする感じ」が同居するような人形になったと思います。あとは、温かさと冷たさの両方がある世界を映像でどう表現できるか。照明と影の作り方でも雰囲気を出せるので、面白い発見ができる作品になりそうです。

もっと前段階の稽古場では、手近な素材を使って作品の原型を模索

SDGs人形劇『The HANDS』
作・演出：くすのき燕（人形芝居燕屋）
美術：宮武史郎（人形劇団むすび座）
音楽：ノノヤママナコ（マナコプロジェクト）
照明：今津知也（オレンヂスタ）
映像：山内崇裕（Ritter）
出演：ゆみだてさとこ・桑原博之（ゆめみトランク）、LONTO（ラストラーダカンパニー）、山内唐平

愛知人形劇センター公式YouTubeチャンネル

愛知人形劇センター公式YouTubeチャンネル
https://www.youtube.com/channel/UCsnfnx-GF7EvvjAWvegFrMw/featured

やっと再開&再会できます! P新人賞に挑む アーティストたちの息遣いを体感!!

P新人賞の「P」とは、人形劇（PUPPET）のP、オブジェ＋身体によるパフォーマンス（PERFORMANCE）の「P」です。人形劇ジャンルの明日を担う新鮮な才能を発掘するために開催され、今年で11回目を迎えます。

今年度のP新人賞2021へは7団体・個人からの応募があり、トランク機械シアター、長谷川唯、APINUNの3団体・個人が最終選考上演会へ進むことになりました。

P新人賞最終選考上演会は2022年2月19日・20日（土・日）の2日間、損保ジャパン人形劇場ひまわりホールにて開催されます。昨年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響でリアルタイム無観客配信で実施しましたが、今年は観客の皆さんと共に楽しみたいと考えています。観客賞を選ぶ参加型の趣向もあるので、ぜひご来場ください。

最終選考上演会
上演団体のご紹介
P 新人賞

P新人賞2021最終選考上演会
2022年2月19日（土）19:00、
20日（日）14:00
損保ジャパン人形劇場ひまわりホール
前売2,000円（愛知人形劇センター会員1,800円）
当日2,200円

最終選考上演会上演団体
◉トランク機械シアター（北海道）
『きらわれドロロンと、魔法の鏡』
◉長谷川唯（公益財団法人すぎのこ芸術文化振興会所属／埼玉県）
『茶壺道中』
◉APINUN（山村佑理×あづみびあの／東京都）
『牛』

3組からメッセージ届いてます!

トランク機械シアター（北海道）
『きらわれドロロンと、魔法の鏡』

【作品紹介】
2020年、劇場の入場制限等が増えていく中、作り手もお客様もある程度安心して観ることができる方法はないかと考えた結果「飛沫を極力飛ばさない」という結論に至り「セリフを全編録音する」という手法を取りました。人形は保育園のこどもたちが作った人形がメインキャラクターを演じ、独特の味を出してくれています。2020年にまとわりついていた、どうにもできないマイナスな感情を、今回お客様みんなで笑い話として語れるような作品になれば良いなと考えています。

【プロフィール】
札幌を拠点に「大人と子どもが一緒に楽しめる舞台を創造する団体」として2012年に1回目の公演を行っています。人形劇・児童劇を中心に、劇場公演のほか、保育園や学校などでも公演を行っています。またワークショップや学校での授業・オンライン公演・おうちで人形劇コンテストを行っています。代表作「ねじまきロボットα」はシリーズ作品として、本公演で11作品・おでかけ公演で30作品ほどを製作。世界中のみんなとお友達になるアルファーの夢を叶えるため、世界中に遊びに行きます。

長谷川唯（公益財団法人すぎのこ芸術文化振興会所属／埼玉県）
『茶壺道中』

【作品紹介】
江戸時代、宇治茶を徳川将軍に献上するために茶を詰めた壺を運ぶ行列、茶壺道中が行われていた。大名行列のように行列が通り過ぎるまで庶民は土下座を強いられ、横切ろうものなら手討ち（武士が無礼をはたらいた町人などを斬り殺す）にされてしまう……。わらべ歌「ずいずいずっころばし」は茶壺道中についての唄と言われています。唄に沿って"絵と語り"で展開される絵話『茶壺道中』。時代の流れと共に技術が発達し、表現方法の幅も広がっている現代。現代的表現とは裏腹に紙芝居のような昔ながらのシンプルな表現の中で繰り広げられるお話に、あなたは何を感じますか。

【プロフィール】
劇団すぎのこ（公益財団法人すぎのこ芸術文化振興会）は1964年に生まれ、今年で創立57年目の人形劇団。子どもたちにナマの舞台を届けようと、北海道から沖縄まで（礼文島などの離島まで呼ばれればどこでも）全国の幼稚園・保育園を中心に巡回公演を行っています。個人としては、2015年2月にすぎのこへ入団。演技の仕事がしたいと探していた時にネットで見かけ、旅生活をしながら子どもたちを楽しませるすぎのこの活動に惹かれます。以降、すぎのこの人形劇俳優として活動しています。

APINUN（山村佑理×あづみびあの／東京都）
『牛』

【作品紹介】
ジャグリングは物と体の関係性で紡ぐ踊り。無地の白い玉が、その配置や人の振る舞い次第で、無限の質感や役割を帯びます。ボールは私にとって体の一部のような存在であり、一生飼いならすことの叶わない絶対的他者でもあります。本創作では、牛と牛飼いの関係性を描く10枚の図で悟りに至る10の段階を表す「十牛図」を主題に、27つのボールと自身の体のコンポジションを振付。あづみびあのによる生演奏との毎秒の押し引きと共に移り行くランドスケープをお楽しみください。

【プロフィール】
APINUN＝山村佑理とあづみびあのによるユニット。本創作をきっかけに結成。山村佑理＝モノと共に踊るジャグラー・振付家。フランスのサーカス学校 Le LIDO 卒。ながめくらしつ・BAZARの舞台作品に出演・一部振付に携わる他、様々なアーティストの共作・共演・ワークショップを行っています。あづみびあの＝ピアニスト。KLAVIERAUM主催。くらやみびあの・物々交換コンサート・聞こえると聞こえないの間の音楽探し・認知症の方と家族を繋ぐ記憶を巡るコンサート等実験的なライブ、ワークショップを企画しています。